

昭和の南海地震体験談

氏 名:森村 清子(もりむら きよこ)

生年月日:昭和 4 年 7 月 27 日

地震を体験した場所:白浜町

当時の家族状況:祖父、祖母、父、母、第二人、妹、従兄



1) 地震発生時の状況

当時 18 歳、私は女学校に通っていて、終業式までに仕上げる裁縫の宿題を、玄関のすぐ次の部屋でして、仕上げにアイロンをしようと、火鉢に鋏を入れて使っていた。

母が起きている私に気づき、「今、何時ごろよ」と聞いたので「もう 4 時半やで」と答えた、と同時に“グラグラ”と地震遭遇。母屋では、祖父と従兄が同室、父と母が同室、妹弟が同室で寝ていた。隠居屋では、一階が養蚕所、二階で祖母が寝ていた。祖父と従兄が寝ていた部屋の、頭上の神棚から上げていた年賀状が“パラパラ”落ちて、祖父は「逃げろ!」従兄は「こんな地震でか?」と躊躇していた。

私は火を使っていたので、「火事になっては」と、火鉢を持ち、外へ行く。

家の前の煉瓦造りの貯水槽の水で消そうとするが、水も波立っていて消すことに苦労した。消した火鉢を持って家に入って、鴨居が歪んで見えて、壁土が“パラパラ”落ちてめくれるのを見た。電気は消えた。

父に「津波来る!荷物もって山へ行け!」と言われて、箆箆から引き出しを抜いて、弟、妹を連れて、家の裏の、真鍋家墓所の小山に避難。

2) 津波襲来時の状況

山に登る時に、“ピチャピチャ”と第一波来襲、津波に追いかけられるように登った。

その時、すでに近隣の人、50~60 人は登っていた。

3) 家族の行動・被害

家族 9 人、全員同じ山に避難して無事。

4) 集落・周囲の被害

この地域では 14 人、近所では、11 人亡くなった。

夜明けと共に山の上でも泣き叫ぶ声や、親と離れた人、「誰が居ない、彼が居ない」と修羅場となる。昭和 21 年の津波で、戦後ではあったが、防空壕に逃げて溺死した人、子供をおぶって(背負い)、近くの山に逃げず、遠くを目指したが為に、親子で溺死した人もいた。

もう大丈夫かと家に戻ってみると、家の前に係留していた砂利船が、家に飛び込んでいて、

平屋建ての母屋は柱と屋根だけ残った。

隠居屋も一階は壊れたが、二階は無事なのに、地震で慌てた祖母が、布団を窓から降ろしてしまい、布団を濡らしてしまった。

正月前で準備していたもち米も、白米も、泥の中、母の里から、物の無い時に祝って貰った、雛人形も、泥の中から拾うのが悲しいと、母が泣いた。

5) 地震・津波後の生活

祖父、父は、行方不明者や自宅から流出したものを捜し、女・子供は、家の周りの流出品を捜し、泥を落としに池に行き(水道は止まっていた)洗い、夜は国民学校や、叔母の家に泊まった。隣保班からは毛布など配給があった。親類にも助けて貰った。

6) 次の災害への備え

地震後、海のそばにあった実家から、道挟んで少し山手に嫁にきた。貴重品や呼笛、は枕元に置いている。

その後、チリ津波あって、少しして地域全体が嵩上げされた。



<写真は津波で落ちた霊泉橋:同時に水道管も崩落した>